

学会発表

- 1) Go M, Hashimoto C (2011) Vocal synchronization in mixed-species associations of blue monkeys and red-tailed monkeys (*Cercopithecus mitis* and *C. ascanius*) in the Kalinzu Forest, Uganda. Biodiversity and Evolution gCOE International Symposium. (2011/07/09-10, Kyoto, Japan).
- 2) Sawada A (2012) Fungivory in wild monkeys on Yakushima Island. 日本生態学会第 59 回全国大会 (2012/03/18, 大津).
- 3) 張鵬, 渡邊邦夫 (2011) A comparative study on the dominance style in three provisioned free-ranging groups of Japanese macaque. 第 27 回日本霊長類学会大会 (2011/07/16-18, 犬山).
- 4) 郷もえ, 橋本千絵 (2011) サルの混群形成－異なる種どうしがどのように一緒にいるのか？ 日本哺乳類学会 2011 年度大会 (2011/09/08-11, 宮崎).
- 5) 郷もえ, 橋本千絵 (2011) カリンズ森林に生息するブルーモンキーとレッドテイルモンキーの混群における発声の同期性. 第 27 回日本霊長類学会 (2011/07/16-18, 犬山).
- 6) 半谷吾郎, Stevenson P, Noordwijk M, Wong TS, 金森朝子, 久世濃子, 相場慎一郎, Chapman CA, Schaik C (2011) 果実生産の季節性が果実食霊長類のバイオマスと種数に影響する. 第 27 回日本霊長類学会大会 (2011/07/17, 犬山).
- 7) 橋本千絵, 安岡宏和, 手塚賢至, 古市剛史 (2011) ウガンダ共和国における森林保護区周辺の地域住民による森林資源の利用の実態. 第 27 回日本霊長類学会大会 (2011/07/18, 愛知県犬山市).
- 8) 松田一希, 村井勲裕, Clauss M, 山田朋美, Augustine T, Henry B, 東正剛 (2011) 霊長類の反芻行動の発見：テングザルの事例. 2011 年度日本哺乳類学会大会 (2011/09, 宮崎).
- 9) 松田一希, Tuuga A, Bernard H, 古市剛史 (2011) テングザル社会の特徴：メスの移籍様式と個体間関係. 第 27 回日本霊長類学会大会 (2011/07, 犬山).
- 10) 三谷雅純, 渡邊邦夫 (2011) シルバールトンの個体数密度はどのように決まるのか？ 第 27 回日本霊長類学会大会 (2011/07/16-18, 犬山).
- 11) 大谷洋介, 澤田晶子, 福永恭啓, 半谷吾郎 (2011) ニホンザル雄の集団からの一時孤立行動：採食戦略の観点から. 日本霊長類学会 第 26 回学術大会 (2011/07, 愛知県).
- 12) 大谷洋介, 澤田晶子, 半谷吾郎 (2011) ニホンザル雄の集団からの一時孤立行動. 日本哺乳類学会 2011 年度学術大会 (2011/09, 宮崎).
- 13) 澤田晶子, 半谷吾郎 (2011) 屋久島におけるニホンザルのキノコ食行動. 第 27 回日本霊長類学会大会 (2011/07/17, 犬山).
- 14) 渡邊邦夫, イスラムル・ハディ, 田中俊明, 木場礼子, 香田啓貴 (2011) インドネシア、リンジャニ山高地に棲むカニクイザルの温泉浴行動. 日本哺乳類学会 2011 年度大会 (2011/09/08-11, 宮崎).
- 15) Hanya G (2012) Mammal abundance affects the distribution of terrestrial blood-feeding leeches in Yakushima. 日本生態学会第 50 回大会 (2012/03/21, 大津).
- 16) Otani Y, Sawada A, Hanya G (2012) Ranging behavior of male Japanese macaques. 第 59 回日本生態学会・第 5 回 EAFES (東アジア生態学会連合) 大会 (2012/03, 滋賀県).

講演

- 1) 半谷吾郎 (2011) サルの数を決めるもの－屋久島のニホンザルの垂直分布と社会変動. 日本生態学会第 59 回大会. 第 5 回日本生態学会大島賞受賞講演.
- 2) 渡邊邦夫 (2011/11/03) 東南アジア島嶼部のサル：その特徴と種分化、人とのかかわり. 第 6 回人類学関連学会協議会合同シンポジウム. 沖縄県立博物館・美術館.

社会進化的分野

<研究概要>

A) コンゴ民主共和国戦時下の森林の破壊とボノボ個体群におよぼす影響についての研究

古市剛史, J Nackoney

1990 年代初頭からの政治的混乱と、それに続く 2 度の戦争により、1973 年以来野生ボノボ (*Pan paniscus*) の研究を続けてきた赤道州ルオー学術保護区の森林とそこに住む野生動物は、大きなダメージを受けた。この間の森林破壊の進行とボノボ個体群におよぼす影響を確かめるため、NASA の提供する衛星画像を用いて、1990 年、2000 年、2005 年の 3 つの時期における森林の状況を比較分析した。その結果、1990-2000 年の時期に伐採地の面積が約 3 倍になっていること、またその多くが、道路から離れた森林の奥深くに点在する小さな伐採地であることがわかった。すなわちこの期間、森に逃げ込んだ住民が家族単位の小さな家とキャッサバ畑を作って生活し、森林が蜂の巣状になっていたことが確かめられた。森の奥に散在する小さな居住地には役人や他の住民の目も届かず、ボノボなどの保護獣を含めた狩猟は自由に行うことができる。一見大きな破壊を受けていないように見えながらも大型ほ乳類がほとんどいない "empty forest" 形成のメカニズムのひとつが、本研究によって確かめられた。

B) ボノボの社会関係と遊動に関する研究

古市剛史, R Heungjin, 徳山奈帆子

コンゴ民主共和国ルオー保護区に生息するボノボを対象に、社会関係と遊動に関する研究を行った。個体追跡にもとづく観察によって、母親の社会的行動が自らの生活史ステージによってどう変化するかを分析するためのデータを収集した。また、メスがリードすると考えられているボノボの遊動のタイミングや方向が、実際にどのようなメカニズムで決まるのかを調べるための予備的調査を行った。さらに、罠にかかって集団についてこられなくなった個体を翌日になって集団のほぼ全個体で搜索に戻るといふ、広く霊長類でも初めてとなる事例を観察し、論文として報告した。

C) スリランカに生息する霊長類の行動生態学的研究

MA Huffman, CAD Nahallage (University of Sri Jayawardenepura)

2004 年末に開始した、スリランカに生息する野生霊長類の分布調査を継続した。これまで行ってきた、南西・南・南東・中央・北東地域における、トクザル (*Macaca sinica*)、グレラングール (*Semnopithecus priam thersites*)、カオムラサキラングール (*Trachypithecus vetulus*) の分布調査を拡大し、スリランカ全土における分布を確かめるために各県、地区レベルにアンケート調査をおこなった。

D) マカクの文化的行動研究

MA Huffman, CAD Nahallage (University of Sri Jayawardenepura), JB Leca (University of Lethbridge)

石遊びなどの文化的行動の社会的観察学習・伝播機構の比較研究を行った。

E) ベトナムにおける、マラリア伝播環境の変容と人獣共通感染性マラリアの出現の理解に向けた学際的研究

MA Huffman, 中澤秀介, R Culleton (長崎大学), 前野芳正 (藤田保健衛生大学), 川合覚 (獨協医科大学), QN Yuyen, R Marchand (Khanh Phu Malaria Research Center, Medical Committee Netherlands-Vietnam)

2010 年からベトナム・中南部にあるカンフー村の丘陵部に棲息する野生ザルの調査を開始した。ヒトとサル間で伝播し、人畜共通感染を引き起こすマラリア原虫を野生カニクイザルやブタオザルの糞から検出する方法を開発し、野生マカク類・ヒト間感染の研究をすすめた。

F) ニホンザルの寄生虫生態学と健康維持に対する食物選択の役割についての研究

AJJ MacIntosh, MA Huffman

ニホンザルの寄生虫感染症、行動活動パターンや植物性食物に関する研究を継続した。

G) 南アフリカ西部岬に生息するチャクマヒヒの採食行動、寄生虫生態学と空間利用の生態学的研究

PA Pebsworth, MA Huffman

2009 年から開始した、南アフリカ西南部にあるワイルドクリフ自然保護地区に生息する野生チャクマヒヒ群の調査を継続した。植物性食物の採食行動、土食い行動と寄生虫感染との因果関係を探ってデータ解析を行った。

H) ニホンザルにおける性的シグナルと求愛行動

C Garcia (CNRS, Paris), L Rigaiil (CNRS, Paris), MA Huffman, FB Bercovitch

オスのニホンザル (*Macaca fuscata*) の交尾行動を誘発するメスの性的シグナルとその信頼性に関する研究を行い、メスの性皮の色と匂いがシグナルとなっているかどうかを調べた。霊長類研究所で飼育されている個体を対象に、行動観察 (性行動)、性皮のデジタル写真撮影 (性皮の色の定量的評価)、ホルモン解析 (糞中の卵ステロイド) を行った。本研究はヒトの性コミュニケーションに影響する生態学的・進化的な要因の理解に寄与すると考えられる。

I) 食物供給の年次変動とニホンザルの個体群パラメータの関係についての研究

辻大和

群れ生活する動物の場合、食物が限られる場合にそれを巡る競争が生じ、顕在化した順位関係の影響が採食成功や繁殖成功に及ぶ場合がある。競争の強さは食物の供給状態から影響を受け、一箇所に集中していれば優位な個体が独占でき、分散していれば群れの全員が利用できるだろう。秋の主要食物である堅果類の供給状態は樹種ごとに異なり、しかもその生産量や結実樹種の組み合わせが年により大きく変化する。したがって、食物を巡る競争の程度も年ごとに大きく変化し、採食成功の順に差は最終的に繁殖成功に影響すると予想される。本研究ではこれまでの長期研究で得たデータを解析することにより、食物資源の供給状態の変動が順位関係を通じて個体群パラメータに及ぼす影響を明らかにした。また、種子トラップによる結実量の調査を本年度も継続して行った。

J) ニホンザルの泊まり場選択に関する研究

辻大和

ニホンザルの泊まり場選択に与える植生タイプ・地形・標高の影響を調べた。捕食者がいない金華山では、食物の豊富な場所や、風をしのげる谷筋、あるいは標高の低い場所が泊まり場として選択される傾向が強いことを明らかにした。

K) マカク類・コロブス類の食性の地域変異に関する研究

辻大和, 和田一雄, 渡邊邦夫, 半谷吾郎, CC Grueter (Max Plank Institute of Evolutionally Anthropology)

過去に公表された霊長類(マカク類、コロブス類)の食性資料を収集・分析し、地域変異とそれをもたらす環境要因について解析を行った。

L) 日本産哺乳類の種子散布に関する研究

辻大和, 見浦沙耶子, 小峠卓也, 村井仁志(富山市ファミリーパーク)

ニホンザルによる種子散布の研究の一環として、東京郊外のニホンザルの糞に含まれる種子の特性(植物の種数、糞一個あたりに含まれる種子の数、健全率など)とその季節変化を評価するとともに、他の地域と比較した。いっぽう、昨年度に引き続き飼育条件下のホンダテン(*Martes melampus*)を対象に給餌実験を行い、種子の排泄時間を評価した。本年度は食物の摂取量が体内通過時間に与える影響について調べ、摂取量の影響はとくに見られないことを明らかにした。

M) 東南アジア産霊長類の採食生態に関する研究

辻大和, B Suryobroto, I Hadi, KA Udayati(ボゴール農科大学), MV Nguyen, VH Nguyen(フエ大学)

インドネシア・パンガンダラン自然保護区およびベトナム・ソンチャ自然保護区でジャワルトン(*Trachypithecus auratus*)、アカスネドゥクラングール(*Pygathrix nemaeus*)、カニクイザル(*Macaca fascicularis*)、およびアカゲザル(*Macaca mulatta*)の基礎生態に関する調査を行い、彼らの食性、活動時間配分、他の動物との種間関係などのデータを収集した。インドネシアでは調査地内に植生プロットを設置し、アシスタントの協力を得てフェノロジー調査を毎月行った。

N) 野生ボノボの集団構造の生成についての研究

坂巻哲也

野生ボノボの毛づくろい交渉、集団メンバーの出会いの交渉、移入メスの社会関係の変遷に関するデータ収集と分析、結果の公表を進めた。集団間関係をテーマに、新たな調査集団の追跡観察、人づけ、個体識別を継続した。行動の多様性をテーマに、隣接個体群の調査も継続した。

O) 野生ボノボ・チンパンジーの広域調査

竹元博幸

環境省環境研究推進費「高人口密度地域における孤立した霊長類個体群の持続的保護管理」のプロジェクトの一環として、コンゴ民主共和国地域に生息するボノボ(*Pan paniscus*)およびウガンダ共和国、ギニア共和国に生息するチンパンジー(*P. troglodytes*)の野生個体群の調査をおこなった。それぞれの地域で生態学的調査をおこない、同時に遺伝学および人獣共通感染症解析のための試料を収集した。

P) ニシローランドゴリラの社会的発達と環境の関連についての研究

松原幹

2010年にイギリス南部のハウレット・ポートリム野生動物公園で行ったニシローランドゴリラの社会的発達調査で収集した行動データを解析した。10年以上かけてコドモが多く育った群れと、群れの創設から5年目の群れのコドモにおける遊び行動を比較することで、コドモの成長発達時における他個体の影響を調べた。また、オトナメス同士やオトナメスとコドモの遊び行動の解析を行い、1歳以上のゴリラにおける非血縁メスとの社会交渉が、若い群れにおいて頻繁に見られることから、コドモの少ない創設間もない群れでは、非血縁メスがコドモの社会的スキルの発達に影響を与えている可能性が推測された。

Q) ニホンザルが転嫁攻撃を行う意義の解明

徳山奈帆子

攻撃を受けたニホンザルは、すぐに前の攻撃には関わらない個体に攻撃することがある(転嫁攻撃)。被攻撃個体にとっての転嫁攻撃を行う意義を明らかにするため、嵐山モンキーパークの餌付け群を対象に調査を行った。

R) 飼育下ボノボ・チンパンジーのアクティビティに関する研究

H Sojung

野生のボノボのメスはチンパンジーのメスと比べて攻撃性が低いとされており、その違いは両者の生息環境の違い、ないし両者の性受容性の違いで説明できると考えられる。この問題を考える糸口として、ボノボとチンパンジーがほぼ同一の環境で飼育されているドイツのライプチヒ動物園において6ヶ月間にわたり両種の行動データの収集を行った。

S) メスニホンザルの加齢に伴うバイオマーカーDHESの変化の研究

RS Cicalise Takeshita, MA Huffman, FB Bercovitch, 清水慶子(岡山理科大学)

ステロイドホルモンのうち、デヒドロエピアンドロステロン(DHEA)とその硫酸エステル(DHEA-S)は、ヒトおよびヒト以外の霊長類の若齢個体に広くみられるホルモンである。DHEA-Sの濃度はチンパンジー、アカゲザル、キツネザル類、ヒトでは年齢と共に低下するため、老化の生物学的マーカーとして役立つと考えられている。しかし、年齢と免疫学的な機能との関係はこれまでほとんど明らかにされていない。本研究では飼育下のニホンザ

ルを対象に、糞中の DHEA-S 濃度の年齢変化（1-26 歳）および季節変化を調べた。

<研究業績>

原著論文

- 1) Garcia C, Huffman MA, Shimizu K, Redman P, Speakman JR (2011) Energetic consequences of seasonal breeding in female Japanese macaques (*Macaca fuscata*). *American Journal of Physical Anthropology* 146:161-170.
- 2) Kaur T, Singh J, Huffman MA, Petzelkova KJ, Taylor NS, Xu S, Dewhurst FE, Paster BJ, Debrunyne L, Vandamme P, Fox JG (2011) *Campylobacter troglodytes* – sp. nov., isolated from feces of human-habituated wild chimpanzees (*Pan troglodytes schweinfurthii*) in Tanzania. *Applied and Environmental Microbiology* 77:2366-2373.
- 3) Kim TW, Ryu HJ, Choi JB, Choe JC (2011) Tower construction by the manicure crab *Cleistostoma dilatatum* during dry periods on an intertidal mudflat. *Journal of Ethology* 29:459-465.
- 4) Leca J-B, Gunst N, Huffman MA (2011) Complexity in object manipulation by Japanese macaques (*Macaca fuscata*): A cross-sectional analysis of manual coordination in stone handling patterns. *Journal of Comparative Psychology* 125:61-71.
- 5) Petrášová J, Uzliková M, Kostka M, Petzelková KJ, Huffman MA, Modrý D (2011) Diversity and host specificity of *Blastocystis* in syntopic primates on Rubondo Island, Tanzania. *International Journal of Primatology* 11:1113-1120.
- 6) Sakamaki T (2011) Submissive pant-grunt greeting of female chimpanzees in Mahale Mountains National Park, Tanzania. *African Study Monographs* 32:25-41.
- 7) Sugiura H, Shimooka Y, Tsuji Y (2011) Variation in spatial cohesiveness in a group of Japanese macaques (*Macaca fuscata*). *International Journal of Primatology* 32:1348-1366.
- 8) Tsuji Y (2011) Sleeping site preferences of wild Japanese macaques (*Macaca fuscata*): the importance of non-predatory factors. *Journal of Mammalogy* 92:1261-1269.
- 9) Tsuji Y (2011) Seed dispersal by Japanese macaques (*Macaca fuscata*) in western Tokyo, Japan: a preliminary report. *Mammal Study* 36:165-168.
- 10) Nahallage CAD, Huffman MA (2012) Stone handling behavior in rhesus macaques (*Macaca mulatta*), a behavioral propensity for solitary object play shared with Japanese macaques. *Primates* 53:71-78.
- 11) Pebsworth PA, Bardi MA, Huffman MA (2012) Geophagy in chacma baboons: Patterns of soil consumption by age class, sex, and reproductive state. *American Journal of Primatology* 74:48-57.
- 12) Tsuji Y, Takatsuki S (2012) Inter-annual variation in nut abundance is related to agonistic interactions of foraging female Japanese macaques (*Macaca fuscata*). *International Journal of Primatology* 33:489-512.

総説

- 1) Furuichi T (2011) Female contributions to the peaceful nature of bonobo society. *Evolutionary Anthropology* 20:131-142.

著書（分担執筆）

- 1) Furuichi T, Idani G, Ihobe H, Hashimoto C, Tashiro Y, Sakamaki T, Mulavwa BN, Yangozene K, Kuroda S (2011) Long-term studies on wild bonobos at Wamba, Luo Scientific Reserve, D.R. Congo: towards the understanding of female life history in a male-philopatric species. (Long-term field studies of primates) (ed. Kappeler P, Watts D) p.413-433 Springer-Verlag, Berlin, Heidelberg.
- 2) Yamagiwa J, Basabose AK, Kahekwa J, Bikaba D, Ando C, Matsubara M, Iwasaki N, Sprague DS (2011) Long-term research on Grauer's gorillas in Kahuzi-Biega National Park, DRC: life history, foraging strategies, and ecological differentiation from sympatric chimpanzees. (Long-term field studies of primates) (ed. Kappeler PM, Watts DP) p.385-412 Springer, New York.
- 3) Chalmers A, Huffman MA, Koyama N, Takahata Y (2012) Fifty years of female macaque demography at Arashiyama, with special reference to long-lived female (> 25 years). (The Monkeys of Stormy Mountain: 60 Years of Primatological Research on the Japanese Macaques of Arashiyama.) (ed. Leca JB, Huffman MA, Vasey PL) p.51-67 Cambridge University Press, Cambridge.
- 4) Huffman MA, Vasey P, Leca JB (2012) Introduction. (The Monkeys of Stormy Mountain: 60 Years of Primatological Research on the Japanese Macaques of Arashiyama.) (ed. Leca JB, Huffman MA, Vasey PL) p.1-10 Cambridge University Press, Cambridge.
- 5) Huffman MA, Fedigan LM, Leca J-B, Vasey P (2012) A brief historical time-line of research on the Arashiyama macaques. (The Monkeys of Stormy Mountain: 60 Years of Primatological Research on the Japanese Macaques of Arashiyama) (ed. Leca JB, Huffman MA, Vasey PL) p.13-27 Cambridge University Press, Cambridge.
- 6) Huffman MA, MacIntosh AJJ (2012) Plant-food diet of the Arashiyama Japanese macaques and its potential medicinal value. (The Monkeys of Stormy Mountain: 60 Years of Primatological Research on the Japanese Macaques of Arashiyama.) (ed. Leca JB, Huffman MA, Vasey PL) p.356-431 Cambridge University Press, Cambridge.
- 7) Huffman MA, Takahata Y (2012) Long-term Trends in Mating Relations of Japanese Macaques at Arashiyama, Japan. (The Monkeys of Stormy Mountain: 60 Years of Primatological Research on the Japanese Macaques of Arashiyama) (ed. Leca JB, Huffman MA, Vasey PL) p.71-86 Cambridge University Press, Cambridge.
- 8) Leca JB, Gunst N, Huffman MA (2012) Thirty years of stone handling tradition in Arashiyama-Kyoto macaques: implications for cumulative culture and tool use in non-human primates. (The Monkeys of Stormy Mountain: 60 Years

of Primatological Research on the Japanese Macaques of Arashiyama) (ed. Leca JB, Huffman MA, Vasey PL) p.223-257 Cambridge University Press, Cambridge.

- 9) 辻大和 (2012) シカの落ち穂拾いーフィールドノートの記録から. 「平成 24 年度版 中学校『国語』」 p.118-127 光村図書出版.

編集

- 1) Leca JB, Huffman MA, Vasey PL (2012) The Monkeys of Stormy Mountain: 60 Years of Primatological Research on the Japanese Macaques of Arashiyama. p.498 Cambridge University Press, Cambridge.

その他の執筆

- 1) 古市剛史 (2011) 現代のことば：空白の 5 時間. 2011 年 5 月 6 日夕刊 京都新聞.
- 2) 古市剛史 (2011) 現代のことば：加速する変化. 2011 年 6 月 24 日夕刊 京都新聞.
- 3) Koyama N (2012) Touches of Humanity in monkey society. In: The Monkeys of Stormy Mountain: 60 Years of Primatological Research on the Japanese Macaques of Arashiyama. Leca JB, Huffman MA, Vasey PL p.42-50 Cambridge University Press, Cambridge, (translated by Huffman MA).
- 4) Ohta E (2012) In search of the phantom monkeys. In: The Monkeys of Stormy Mountain: 60 Years of Primatological Research on the Japanese Macaques of Arashiyama. Leca JB, Huffman MA, Vasey PL p.28-33 Cambridge University Press, Cambridge, (translated by Huffman MA).

学会発表

- 1) Huffman MA (2011) サルマラリアの宿主となる東南アジアのマカク属を追って. 日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業：森林発生ヒトマラリアと人獣共通感染症サルマラリアの生態研究会 (2011/07, 獨協医科大学).
- 2) Huffman MA (2012) How primates deal with disease and zoonoses potentially affecting humans in the tropics. International Symposium on Forest Malaria: Man-Mosquitoes-Monkeys (2012/03, Nha Trang, Vietnam).
- 3) Huffman MA (2012) 霊長類の自己治療行動ー予防と治療. One World, One Health Symposium, 神戸アニマルケア国際会議 (2012/02, 神戸).
- 4) Huffman MA, Nahallage CAD (2011) Non-invasive methods for the study of the diseases of monkeys and man in nature. International Symposium: Integrative Research on Monkeys, Malaria and Man in Asia (2011/06, Colombo, Sri Lanka).
- 5) Nahallage CAD, Huffman MA (2011) Primates of Sri Lanka. International Symposium: Integrative Research on Monkeys, Malaria and Man in Asia (2011/06, Colombo, Sri Lanka).
- 6) Tokuyama N (2011) Why do Japanese macaques perform redirected aggression? International Symposium for Conservation of Wild Bonobos and Chimpanzees, Research Center of Ecology and Forest (2011/08, Kinshasa, DRC).
- 7) Tsuji Y, Fujita S, Sugiura H, Nakagawa N (2012) Rome was not built in a day: time to grasp information on plant feeding of wild Japanese macaques (*Macaca fuscata*). ESJ59/EAFES5 (2012/03, Otsu).
- 8) Tsuji Y, Miura S, Shiraishi T (2011) Gastrointestinal passage time of seeds ingested by captive Japanese martens *Martes melampus*. 日本哺乳類学会 (2011/09, 宮崎市).
- 9) 古市剛史 (2011) ボノボ：水がボノボを生んだ～コンゴ盆地のボノボの進化と生活. SAGA シンポジウム (2011/11, 熊本市動物園).
- 10) 橋本千絵, 安岡宏和, 手塚賢至, 古市剛史 (2011) ウガンダ共和国における森林保護区周辺の地域住民による森林資源の利用の実態. 日本霊長類学会 (2011/07, 犬山市).
- 11) 松原幹 (2011) ニシローランドゴリラの遊び行動に与える家族構造の影響. 日本動物心理学会・日本動物行動学会・応用動物行動学会・日本家畜管理学会合同大会 (2011/09, 慶応義塾大学).
- 12) Nackoney J, 古市剛史, Baraldi A, Nolinari G (2011) コンゴ民主共和国の戦時下のルオー保護区周辺の森林の破壊とボノボ個体群におよぼす影響のモニタリング. 日本人類学会 (2011/11, 沖縄県立博物館・美術館).
- 13) 杉浦秀樹, 下岡ゆき子, 辻大和 (2011) ニホンザル野生群における群れの凝集性の維持機構. 日本霊長類学会 (2011/07, 犬山市).
- 14) 杉浦秀樹, 下岡ゆき子, 辻大和 (2011) ニホンザルは群れのまとまりを保つために, どのような動きをしているか. 日本哺乳類学会 (2011/09, 宮崎市).
- 15) 徳山奈帆子 (2011) ニホンザルはなぜ二次攻撃を行うのか. 日本霊長類学会 (2011/07, 犬山市).
- 16) 辻大和 (2011) 金華山島におけるニホンザルの生態研究ー長期調査からみえてきたことー. 日本哺乳類学会 (2011/09, 宮崎市).

講演

- 1) Huffman MA (2011/04) The evolution of self-medication in the animal kingdom and the origins of traditional medicine in humans. Department of Wild and Resources Faculty Seminar Utah State University.
- 2) Huffman MA (2011/05) The evolution of self-medication in the animal kingdom. Visiting Speaker in Primatology Series, Department of Anthropology University of Calgary.
- 3) Huffman MA (2011/09) Chimpanzee use of plants as medicine and the evolution of self-medication in primates and other animals, Living Links to Human Biology. Mind and Medicine Lecture Series of the Royal Zoological Society of Scotland, Edinburgh Zoo.
- 4) Huffman MA (2012/01) スーパーサイエンスハイスクール講義. 一宮高校.

- 5) Huffman MA (2011/05) The evolution of self-medication in the animal kingdom: great and small minds 'think' alike. taff Development Colloquium Washington National Zoo.
- 6) Tsuji Y (2011/08) Feeding ecology of silvered leaf monkeys at Pangandaran Nature Reserve. West Java, Indonesia: a preliminary report, IPB Bogor, Indonesia.
- 7) 古市剛史 (2011/10) ボノボはヒトの何を語るか. モンキーカレッジ, 犬山市 日本モンキーセンター.
- 8) 古市剛史 (2011/11) ボノボ, 最後の類人猿. 第2回回の拠点セミナー 京都大学東京オフィス, 東京.
- 9) 古市剛史 (2011/11) ボノボの住むコンゴ盆地の大熱帯雨林: その現状と将来. プリマーテス研究会 日本モンキーセンター, 犬山市.
- 10) 古市剛史 (2011/05) スーパーサイエンスハイスクール講義. 一宮高校.
- 11) 落合知美, 打越万喜子, 今井啓雄, 郷康広, 西村剛, 友永雅己, 伊谷原一, 松沢哲郎 (2012) 大型類人猿情報ネットワーク (GAIN) 第3期の活動に向けて. ザーだがや (2012/03/20, 名古屋).
- 12) 辻大和 (2011/09) サルを通して生き物のつながりを考える〜金華山島のニホンザルの観察から〜. 京都大学霊長類研究所東京公開講座 日本科学未来館, 東京.
- 13) 辻大和 (2012/03) 研究者の仕事. 愛知県犬山市立城東中学校「働く人の話を聞く会」, 犬山市.

行動神経研究部門

思考言語分野

<研究概要>

A) チンパンジーの比較認知発達研究

松沢哲郎, 友永雅己, 林美里, 伊村知子, 足立幾磨 (国際共同先端研究センター), 服部裕子, 濱田穰 (進化形態分野), 西村剛 (系統発生分野), 南雲純治 (国際共同先端研究センター), 鈴木樹理, 宮部貴子, 前田典彦, 渡邊朗野, 兼子明久, 渡邊祥平 (以上, 人類進化モデル研究センター), 熊崎清則, 落合 (大平) 知美, 高島友子, 酒井朋子 (京都大)

1群14個体のチンパンジーのうち、特に10-11歳になる子ども3個体を対象として、比較発達研究を総合的におこなった。認知機能の解析として、コンピュータ課題や対象操作課題など各種認知課題においてチンパンジーのおとな個体や、ヒト幼児との比較検討をおこなった。また、定期的に脳や身体各部の計測もおこなっている。

B) チンパンジーの知覚・認知能力の比較認知科学的研究

松沢哲郎, 友永雅己, 伊村知子, 足立幾磨, 服部裕子, 南雲純治, 狩野文浩, 兼子峰明, 村松明穂, 兪リヲ, 植田想, CD Dahl, M Kret, 高島友子, 村井千寿子 (玉川大), 牛谷智一 (千葉大), 後藤和宏 (京都大), 佐野明人, 田中由浩, 酒井基行 (以上, 名工大)

チンパンジーとヒトを対象に、認知・言語機能の比較研究を継続しておこなった。主として、1個体のテスト場面で、数系列学習、色と文字の対応、視線の認識、顔の知覚、注意、パターン認識、視覚探索、カテゴリー認識、物理的事象の認識、視聴覚統合、情動認知、運動知覚、行動の同調などの研究をおこなった。

C) チンパンジーにおけるアイトラッカーを用いた視線計測

友永雅己, 狩野文浩, 兼子峰明, 植田想

チンパンジーとヒトを対象に、非拘束型のアイトラッカーを用いて、各種の視覚刺激提示時や課題遂行時の視線の計測をおこなった。

D) 野生チンパンジーの道具使用と文化的変異と森林再生

松沢哲郎, 林美里, 大橋岳, C Martin, 山越言 (京都大), 森村成樹, 藤澤道子 (以上, 野生動物研究センター), 山本真也 (ボノボ研究部門), T Humle (ケント大), D Biro (オックスフォード大), C Sousa (リスボン新大), K Koops (ケンブリッジ大), K Hockings (リスボン新大), S Carvalho (ケンブリッジ大), N Granier (リエージュ大), L Martinez (梨花女子大), AG Soumah (IREB), T Tagbino (カンカン大)

西アフリカ・ギニアのボッソウと、東隣のニンバ山とコートジボワール領内、西隣のディエケの森、南隣のリベリア領内で、野生チンパンジーの行動と生態を調査し、記録の解析をおこなった。また、「緑の回廊」と呼ぶ森林再生研究を試み、苗木を覆う東屋を設置する活動を続けた。

E) 飼育霊長類の環境エンリッチメント

友永雅己, 松沢哲郎, 林美里, 熊崎清則, 落合 (大平) 知美, 小倉匡俊, 山梨裕美, 櫻庭陽子, 川上清文 (聖心女子大), 鈴木樹理, 前田典彦, 渡邊祥平 (以上, 人類進化モデル研究センター)

動物福祉の立場から環境エンリッチメントに関する研究をおこなった。3次元構築物の導入や植樹の効果の評価、視覚刺激の呈示によるストレスの低減、個別飼育個体に対する動画刺激提示の効果、認知実験がチンパンジーの行動に及ぼす影響の評価、木の枝や草などを使った異常行動の低減、エンリッチメント用の遊具の導入などの研究をおこなった。